



■写真1—明治末期の鷗島瓶子岩前に停泊する弁財船と帆船

あの頃の風景

海道「北前船」編 第2回
ニシンがもたらした繁栄と文化「江差」

日本交通技術株式会社/設計部/第二設計課
中村和也 NAKAMURA Kazuya



■写真2(上)—明治末期頃、丘陵地から鷗島方向を写したもの。江差港が本格的に築港される前。瓦屋根の家屋と板屋根の家屋が混在している
■写真3(左)—現在の同方向写真。江差港のバースが整備され、現在は砂・砂利・石材等の積出港、奥尻島へのフェリー基地となっている



■写真4(上)—大正中中期頃の江差港の様子。写真中央から右上に延びる家屋が北前船により栄えた関川家屋敷
■写真5(右)—現在関川家屋敷跡には病院が建てられている。関川家別荘は町指定有形文化財として保存されている



かつて「江差の五月は江戸にもない」と謳われるほど、ニシンという豊富な脂肪分と栄養価をもった魚によって繁栄を極めた地があった。北海道の南西部に位置する江差は、沖合500mに浮かぶ鷗島により天然の良港が形作られ、北前船による交易の重要な拠点であった。

江戸時代、稲作が皆無で自給自足の不可能な松前藩にあって交易権の確保は藩是であった。そのため交易機能を有する商業港の育成が重要課題となり、寛永7年(1630年)に城下福山・江差・箱館の三港以外での交易を禁じ、沖ノ口番所を設置して交易を支配する藩体制をとった。当時、まだまだ未開の地であった蝦夷地に魅力を感じ、ここに介在したのが近江商人であった。江差港の背後に広がる檜山七山から伐採されたヒバとも呼ばれるヒノキアスナロ材の林産物、ニシンや干鮑・海參などの海産物、その他蝦夷地の交易品を大阪に運んだ。

元禄期(1688年～)に入ると幕府の殖産政策に伴い、各藩では農作物の増産が急務となり、米・綿花・藍・菜種などの栽培に必要となる肥料が求められた。この時代の肥料といえば、下肥(人糞及び人尿)・草木灰・刈敷(刈り取った雑草や稲藁・麦藁などを水田に敷き込む伝統的な施肥法)・牛馬糞が専らであった。このため安価かつ大量にとれる魚肥の需要が高まることとなった。そこで松前藩は、享保期(1716年～)に場所請負制度へ転換する。これは、郡単位の地域の漁業権と行政権を商業資本家に運上金(交易に対する課税)をもって請負わせる制度である。これにより経営能力に長けた商人によりニシンの漁獲高が増え、宝暦期(1751年～)に松前藩の最盛期を迎えるのである。

元禄期の政策により貨幣経済が浸透し、地場商人の台頭が促され、近江商人による流通独占が崩れていった。寛政期(1789年～)には近江商人から地場商人の買積船(北前船)へと転換されていく。北前船は、物流が未発達であるこ



■写真6(上)—大正2年のニシンの沖揚げの様子。「ニシンは魚に非ず、米である」と言われたほど重要な海産物であった
■写真7(左)—現在は江差港の岸壁となっている。奥にマストだけ見える船は、この地で座礁沈没した徳川幕府軍艦開陽丸(復元)



とを逆手に取り、生産地(供給地)と消費地(需要地)の価格差により利益を得る商法である。登り荷として蝦夷地の海産物、下り荷として米穀・塩・醤油・味噌・酒類・生活用具(網・薬工品等)・衣類雑貨を買積して販売利益を得ていた。

これらの物資と共に流入した文化と、江差の風土が融合し、独特な文化が生れた。信州馬子唄・伊勢松坂節を起源とした「江差追分」、京都祇園祭りを基調とし絢爛豪華な山車行列の「姥神大神宮渡御祭」、出稼ぎ労働者が持ち込んだといわれているヒノキアスナロ伐採の安全操業を願った「鹿子舞」、ニシン漁の音頭として定着した「江差沖上げ音頭」などがある。

一時は、ニシン漁により財貨を蓄えた商家が立ち並んだ江差であったが、北前船もやがて終焉の時を迎える。明治時代に入ると、西洋型帆船や蒸気船の登場による船舶の大型化や高速化、通信網(電報)の発達による価格の平均化、鉄道網の敷設による舟運の衰退、ニシンの不漁、安価な化学肥料の登場により魚肥が最大の商品であった北前船の出番は無くなり、江差の街も寂れてしまったのである。

現在、町勢は停滞しているが、この歴史的・文化的遺産のある街並みを保存しようと「歴史を生かすまちづくり事業」を推進している。街並みとともに、ニシンがもたらした江差独特な文化が地域コミュニティと共に守り続けられることを期待したい。

- <参考文献>
1)『日本水上交通史論集 第1巻』柚木学 1986年5月 文献出版
2)『北前船残照』小林優幸 2002年5月 江差町民話研究会
3)『江差風土記』宮下正司 1991年4月
4)『江差町ホームページ』(<http://www.hokkaido-esashi.jp/index.htm>)

- <取材協力>
1)江差町郷土博物館(旧檜山爾志郡役所)学芸員 宮原浩

- <写真提供>
写真1、2、4、6、8 江差町
写真3、5、7、9 筆者



■写真8(上)—大正中期頃の江差の海岸の様子。商家の家屋が海岸線まで建っている。家屋の基礎は北前船でバラ石の役割をした笏谷石を使用。ヒノキアスナロ材を用いた独特の建築様式である
■写真9(右)—現在の同位置の写真。当時の海岸線の位置は国道227号線となっている

